

『資質・能力と学びのメカニズム』第4章「各教科等の特質の応じた見方・考え方」考察

奈良教育大学 中澤 静男

平成29年3月に公示された次期学習指導料のキーワードの一つが、「見方・考え方」の育成である。この「見方・考え方」と教科の関わりに関して、筆者は、カリキュラムの3つの編成原理の一つが「文化遺産の継承・伝達」であり、教えるべき内容が文化遺産であるとする。そして「親学問の固有なもの」「見方・考え方」と、それを達成する認識なり表現の方法を身につけ、自在の活用できるようにすることが、「本来の系統学習、系統指導なのです」と述べる。そして教科の系統を感得することで、事象の見方や取り扱い方が洗練化されると指摘するが、「感得」が促される指導方法については述べていない。しかし、「見方・考え方」を働かせて個別具体的な対象にアプローチすることで、それに見合った「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力・人間性等」、「知識・技能」も無理なく習得できるとまとめている。

上記について、次の3点から考察を加える。1つ目に教科の本質、2つ目に非常識である教科の捉え方、3つ目が野生の思考についてである。

1つ目の教科の本質について、筆者は「学習の主体としての子どもや、子どもが生きる社会的文脈とはひとまず切り離れたところに教えるべき内容が超然と存在すると考える（本質主義・エッセンシャルイズム）」と述べているが、社会的文脈と切れているものを教える意味はないであろう。すべての知識もスキルも文脈的であり、子どもの生活経験と学習内容を結びつけるのが教員の役割である。（よく数学などの授業でまず公式を暗記し、それを使って問題を解く授業がある。数学の教員にならない限り、一生使わないであろう公式を暗記させ受験対策の解法スキルを教え込んでも、大学入学と同時に忘れ去られるのがオチである。）

2つ目の教科の捉え方について、「教える知識や価値の多くは現在では常識であっても、生み出された当時はおよそ非常識な代物」、「教科は非常識であるがゆえに素晴らしい」と筆者は捉えている。筆者は現代の教科内容が「常識」であり、絶対的なものと捉えているようである。それでは、ガリレオ時代のカトリック教会と同じである。すべての知識や価値は、その時代、その状況に依存する文脈的なもの、相対的なものであり、発見や研究によって変容していくものとして教えるべきである。教科の本質主義を信奉する筆者自身は、教科の捉え方が2004年の国立天文台の研究者と同じである。

3つ目の野生の思考である。レヴィ・ストロースが紹介する「野生の思考」は、未開人たちのガラクタ思考で、企画なしにありあわせのガラクタを組み合わせて構造を作る「器用仕事」と呼ばれるものである。出来上がりを彼らも予測しておらず、出来上がった作品には無限の意味づけが可能だというもので、言語・メディア論の研究者である花村（2015）は浪費的思考と名づけ、「これほど人間的で純粋なつくる喜びというものが、他に考えられるだろうか」と述べている。つまり、図画工作科の中でも特に工作に没頭する子どもの思考は野生の思考に近いかもしれないが、命題論理的な操作を行う国語科や算数・数学科や理科に「野生の思考」が同居する可能性は低いであろう。また、家庭生活における調理は「でっちあげ」かもしれないが、食べることができるかどうかかわからないものをつくっているのではない。筆者の「野生の思考」の理解は不十分であると言わざるを得ない。

上述したように、筆者の教科の本質主義志向は、柔軟な「見方・考え方」の育成を阻害するだけであり、突然持ち出した「野生の思考」は混乱を招くだけである。ただ、内容ではなく「見方・考え方」の角度から教科等を眺め直すという提案には首肯できる。そうすることで、先行き不透明な社会においても、よりよく生きていく資質・能力を育成するという新学習指導要領の趣旨が生かされていくと考える。